

東京女子高等師範學校
日本幼稚園協會

幼稚園の教育

主 幹

堀 七 藏

第二十五卷 三月號 第三號

歐米の保育狀況……………上島直之

高等女學校に幼稚園を附設せねばならぬ……………堀 七藏

師難のいろく……………藤 五代策

表情遊戯「雪の子」……………土川五郎

妙な子守唄……………金子彦三郎

幼兒の眼……………東京女子高師附屬幼稚園

群馬縣保育會總會情況……………森島順之助

附屬幼稚園だより……………醫 峰 生

長編小説『兼ちゃん』……………岡田美津

日本體育會體操學校講師
大阪府金岡女學校校長
童謡新舞踊研究會主幹

久保富次郎先生著

菊判總クロス製箱入美本
舶來上質アートペーパー
圖解寫真六十餘圖挿入

各大家 合作 童謡 新遊戯

次 目

みず汽車
夏のの鶯
お月さん
とほせんぼ
虹の橋
お山の將
月夜の鐘
鈴夜の蘭
お星様
子守唄

雜誌明日の教育
三澤木露朝歌
光の露朝歌
西原白長十會風朝歌
北原龍白長十會風朝歌
弘原龍白長十會風朝歌
野居景雨太
池居景雨太
西條八景雨太
本八景雨太
西八景雨太
黒澤隆朝童作
黒澤隆朝童作
黒澤隆朝童作
黒澤隆朝童作
黒澤隆朝童作
黒澤隆朝童作
黒澤隆朝童作
黒澤隆朝童作
黒澤隆朝童作
黒澤隆朝童作

付 奏 件 ノ ア ビ

我國古來の舞踊と新來のダンスの長所を吸入れ兒童に適應する様に創案した表情遊戯で學校教材として最も理想的のもの、殊に上品に優雅に謡の示す通り表現し無意味な手振、餘計な表情を入れず、曲の表現に對しては最も注意せる遊戯として無比の教材書であります。

發 兌

東京上野公園寛永寺坂下 上根岸八八
振替東京四六一一一番電下三〇四七番

教 文 書 院

正 價 金 二 圓 五 十 錢
書 留 送 料 金 十 五 錢



育教の兒幼輯編會協園稚幼本日

會長

東京女子高等師範學校校長

茨木清次郎

主幹

東京女子高等師範學校教授

堀七藏

賛助員

東京女子高師教授

嚴谷季雄

東洋大學教授

棚橋源太郎

東京帝大醫科講師

醫博

乙竹岩造

東京女子師範學校校長

高島平三郎

東京高師教授

醫博

大瀨甚太郎

東京女子高師囑託

龍山義亮

慶應大學教授

醫博

唐澤光德

帝國教育會理事

土川五郎

東洋幼稚園長

醫博

岸邊福雄

松住高等學校校長

野口援太郎

早蕨幼稚園長

文博

久留島武彦

京都帝大教授

乘杉嘉壽

帝國教育會會長

文博

澤柳政太郎

東京女子高師教授

野上俊夫

東京高師教授

文博

佐々木秀一

東京帝大教授

倉橋惣三

東京女子高師教授

文博

下田次郎

東京女子高師教授

文博

東京女子高師教授

醫學士

菅原敏造

奈良女子高師校長

文博

東京市風務課長

醫、文博

富士川游

奈良女高師附屬幼稚園主事

文博

東京女子高師講師

藤井利馨

東京高等學校校長

湯原元一

長崎縣師範學校校長

文博

福士末之助

東京帝大教授

安井哲子

東京女子高師講師

藤士末之助

日本女子大學長

森川正雄

東京女子高師講師

文博

日本女子大學長

東京帝大教授

吉川熊次

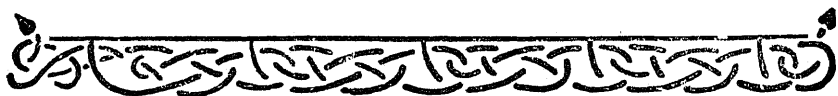




第 三 號 幼 兒 教 育 第 二 十 五 卷

目 次

歐米の保育狀況……………	上島直之……………	六
高等女學校に幼稚園を附設せねばならぬ……………	堀 七 藏……………	九
踊雛のいろく……………	藤 五代策……………	六
遊戯「雪の子」……………	土川五郎……………	六
妙な子守唄……………	金子彦三郎……………	一〇
幼児の眼……………	東京女子高等師範附屬幼稚……………	一七
群馬縣保育會總會情況……………	森島順之助……………	二〇
附屬幼稚園だより……………	醫 峰……………	二三
長編小説「兼ちゃん」……………	岡田美津……………	二六



書圖刊新行發院書文教

日本幼稚園協會編纂
堀七藏主幹

幼 兒 の 教 育

每月一回十五日發行
每號金三十五錢

日本幼稚園協會譯

稚 幼 園 及 小 學 校 保 育 要 目

定價金一圓五十錢

坂 內 み つ 著

保 育 材 育

子 供 の 遊 ば せ 方

定價金一圓八十錢

矢 澤 菫 月 著

圖 畫 藝 術 教 育 論

定價金二圓五十錢

茂木由子
萩原一郎
川英作
五郎振付

歌 曲 作 振 著

遊 戲 動 作 を さ な ご の う た

定價金二圓五十錢

久 保 富 次 郎 著

童 謠 新 遊 戲

定價金二圓五十錢

鳥 越 保 太 著

國 語 教 授 の 考 察 及 考 査

定價金二圓七十錢

中 國 園 木 精 進 共 著

主 體 育 を と し た る

競 技 と 球 技

定 價 金 二 圓 七 十 錢

東京女子高等師範學校
日本幼稚園協會

幼 兒 の 教 育

主 幹
堀 七 藏



第 三 號 1925 第 二 十 五 卷

歐米の保育狀況(一)

大阪市船場幼稚園長

上 島 直 之

は し が き

私が昨年約一ヶ年間歐米の教育視察中に幼稚園を見て、我國のそれと對照して感じた事が多くあつた。其中の主なるものに就て少しく述べて見たいと思ふ。歐米と言つても幼稚園を見たのは實は獨、英、米の三ヶ國で然も餘り數多く見たのではないから、私の言ふ所が歐米一般に通じた事でないかも知れぬが、少くも私の實際見た丈の幼稚園ではかくあり、又私が斯く感じたと言ふ事は間違のない事である。以下逐條的に述べる。

一 園兒の數少く且つ一保姆の擔任する幼兒數も少き事

英國は別として他の國で何百と言ふ幼兒を收容して居るものは極く少ない。又一保姆の擔任して居る幼兒數も我國のよりは少いやうである。

ベルリンのアウグスタ女學校附屬幼稚園は三歳乃至六歳で二十九名、これに主任保姆一名と助手保姆一名、女學校の上級生で保姆志願者の練習生二十八名であるから、兒童一名につき一名の保姆の割合となる。

ベルリンのナホスト町の幼稚園は、四十人の幼児を收容し、保姆二名を置いて居る。

英國ではキングダーガーデン(幼稚園)と言はずに、インフアントスクール(幼學校)と言つて、學校系統の中に繰り込み、學校式であるから可なり大なるものがある。例へばロンドンのマンスタードの幼學校では、四百人を十學級に組織して居るから、平均一學級四十人となるが、學級に教師二名を配置して居るから、一人平均二十人の擔任となる。

紐育のホレスマンの幼稚園は、コロンビア大學のチーチャースカレッツの附屬練習所になつて居るから、設備も完備し、保育も參考となるものが多い。此園の人員は次表の通りである。

年 齡	幼兒數	保 姆	助 手
A (二歳六ヶ月—四歳)	一五	一	若干(學生)
B (四歳—五歳)	二五	一	一
C (五歳—六歳)	六〇	四	

A、Bの二組は小さい保育室で別々に保育されて居るが、C組は大なる保育室で總ての保育材料を備へ、此中で四つに又分團されて居る。全部で百人の園児を有して居るから、歐米としては非常に大きな方である。一保姆の擔任兒童數は十五名を超さなす。

シカゴ大學の附屬幼稚園は、二十人餘で保姆二名となつて居る。

日本でも私立の幼稚園では、兒童數が比較的少いやうであるが、公立の幼稚園特に大阪は非常に多いやうである。私の幼稚園は二百名を超えて居る。種々の設備や、施設をする上に人數の少いのは便宜であるが、團體生活、社會生活になれしめる爲には、全體としての人數が多い事は寧ろ望ましい事ではあるまいか。然し一保姆の擔任する兒童が多い事は、保育の本質上から考へて無理な様に思ふ。

二 個別的又は自發的の取扱を重んずる事

幼稚園は日本でも兒童の個性を觀察し、個別的に取扱ふ事は小學校よりは餘程進んで居るが、手技等とはかく一組同一材料で一齊的に取扱ふ傾きがある。歐米では團體遊戲とか、唱歌とか云つた全部一齊に取扱ふのを必要とするものゝ外は全部個別的取扱をして居る。又自發的活動を非常に重んじて居る。次に私の見た實際や又其園の保育の方針とする所等で此點に關した事を述べる。

〔1〕 ベルリンのナホスト幼稚園

私の行つた時には、丁度作業室で各自思ひ思ひの作業をして居た。(此園はモンテッソーリ式のものである。獨逸はフレールベルを出した國故フレールベル式の幼稚園も多いが、又モンテッソーリ式の幼稚園も可なりあつて盛に研究をして居る。)各自異なる仕事をして居る時に、保姆は一々これを指導誘發して居る。飽いてくれば他の仕事に移ると言ふ風である。試に私の此時の仕事で記憶して居る丈けを擧げても次のやうに多い。

イ、數字と對照して小石を其數丈け列べる事

ロ、アルハベットの觸覺練習及發音

ハ、鈕の入れ方、紐の結び方

ニ、積 木

ホ、笹 木

ヘ、畫 方

ト、切抜文字を並べて言葉を作る事

チ、玩具、物品と其名稱を合はす事

〔2〕 ロンドンの幼學校

前に述べたやうに、英國のは學校と名づける丈けに形式的で訓練的である。前は小學校と同様に、讀方、書方、算術の各科に試験を課したものであるが、近頃は段々自由の精神に於て又教科の性質、教授の方法に於て他國の幼稚園に近くなつて來て居る。一のクラスは同時に同一の科目を取扱つて居るが、それでも兒童の能力に應じて、各種カード、繪畫、玩具等を使用して、全くの個別的學習である。

〔3〕 紐育のホレースマンの幼稚園

此園の保育方針に擧げてある所を見ても、如何に個別的、自發的取扱を重んずるかを知らる事が出来る。次に方針中に問題に關係した方面のみを擧げる。

イ、幼兒自體發育に留意の項に……活動を獎勵すべき環境及材料中に於て運動の自由を重んず

ロ、個別的取扱によつて知識を成長せしめる

ハ、幼兒側への要求……色々な材料を以て彼自身の問題を實行せねばならぬ。兒童は出来る丈け目的を立て、立案し、實行し、而して其結果を批評せねばならぬ

ニ、教師側への要求……兒童に願はしい環境を供給して、兒童が段々と仕事のスタンダードを高めるやうにせよ。

告げ知らせ、暗示、必要な時は批評に於て助けよ。兒童が彼自身の價值ある問題を持たない時、或は仕事の或タイブに向つて必要であると考へた時に問題を與へよ

ホ、教師は幼兒を個々に取扱ひ、彼等の仕事と進度を注意して記録する事

又保育材料の選擇について見ても、教師側から突發的に提出するのではなく、成るべくならば幼兒側から材料を引き出す事

に勉め、已むを得ない時に教師が暗示を與へる事になつて居る。即ち保育の仕事は教師及幼兒の兩方の側から供給する事である。

イ、保育室及園に設備された環境から、幼兒の感應によりて選ぶ。此環境は靜止的ではなく、幼兒の發達に應じて變へる

ロ、教師及幼兒の直接の暗示から

幼兒が園以外の經驗から得て之を全體の研究に移したいと願ふ教材。……例へば或兒が繭を園に持ち來たしたならば、之は蠶 び絹に就て論議するやうに全體を導く。教師が價值ありと考へ、又團體の仕事として願はしいと思つた材料。……例へば、一兒童がテーブルカバーを造つた。そして其を如何に裝飾すべきかを知りたいと願ふ時に教師は全體に暗示を與へて、他の兒童にも新しい裝飾の方法に興味を持つてくるやうにする。

ハ、尙此外に材料は曾て幼稚園で兄弟を持つた兒によつて、或活動が年々繰りかへされる等傳承的に選ばれるものも數多し。

實際保育の様を見るのに、各自作業の時間には幼兒は各自の問題を選ぶから、仕事は各種多様である。詳細は次項の問題で詳細に述べる事にする。

三 フレーベルやモンテツソリーの恩物以外に重要な

保育材料の多い事

日本でも此等恩物の外に、種々考案されて居るやうではあるが、何れかと言へば、此等恩物を崇拜し過ぎる傾きはないかと思はれる。勿論此等の恩物は非常な研究の結果生れたもので、保育上重大な意味を有するものである事は否定するも

のではないが、此等が人生の全體、保育の全體ではないことは明である。少くも實際生活に密接せしめる上からは、此等恩物の外に活材料を求めなければならぬ。此點に於て歐米では可なり注意されて居る。

〔1〕 ベルリンのアウグスタの幼稚園

手工製品を見ると廢物利用が可なり行はれて居る。例へばマッチの空箱を天秤の皿や、家の土臺、引き出し等に利用し、鉛筆の使ひ残りやマッチの軸木で小さい人形を造る等、創作的のものであると共に、經濟節約と云つた方面にも觸れると思ふ。

又保姆の造つた玩具も多くあつて、中に色々のタイプの建物があつた。此は實際上の知識を授けるに役立つ。又市場の家、賣臺があり、色々の品物を用意し、古い貨幣で賣買の遊びをして居るのを見たが、之も亦實際生活に密接に結びついたのである。

又兒童の植物園があつて各兒の擔任場所を定められ、各自に種々の植物を培養して居る。此收穫物は小さい料理器があつて料理して食するやうになつて居る。自然と親しみ勤勞の習慣を養ふ外に料理と云ふ日常生活に餘程觸れて居る。

〔2〕 紐育ホレスマンの幼稚園

此園の實際の保育方法は、此問題及び前の問題に餘程參考になるから詳細に述べる。

イ、一日の仕事の割當(最下級は省く)

八時四五分—一〇時

到着、靴ハキカエ、各自作業

一〇時—一〇時三〇分

御話、唱歌(全級)

一〇時三〇分—一一時

ランチの用意及ランチ

一一時—一一時一〇分

休憩

歐米の保育狀況

一一時一〇分—一一時三〇分

靴ハキカエ、皿洗、御話

一一時三〇分—一二時

色々な活動、遊戯、戸外遊び、遠足等

此表を見ても分るやうに、所謂恩物は各自作業の一部に於て取扱はれるのみで、之よりも寧ろ他の仕事に力を入れて居るやうに思はれる。

序にシカゴ大學附屬幼稚園の一日の仕事を次に擧げる。

八時四五分—九時一五分

各自選擇作業

九時一五分—九時三〇分

遊戯(律動)

九時三〇分—九時四〇分

競争遊戯

九時四〇分—一〇時

談話

一〇時—一〇時四五分

社會生活及自然研究に關した作業

一〇時四五分—一一時一五分

戸外遊び

一一時一五分—一一時四五分

音楽及文學

一一時四五分

放課

ク、實際 作業

○登 園

園に來る

外套室に行く

自分の事は自分でするやうに導く

自分の戸棚を見出す

外套をぬぐ……敏捷に外套をぬぐ習慣を養ふ

帽子外套を掛け、手袋等を所定の場所に置く……ボタンのかげはづしを習ひ自己の品物を整頓する習慣を與へる

辨當を所定場所に置く……

室に來り先生及兒童に會ふ……挨拶を覺へる

靴をかへる……紐の練習

エブロンをつける……他人を助ける

○作業の選擇

登園し準備終れば直ちに各自の仕事を選択する。此時保母は必要であれば選擇を導く。共同作業を要する時は世話する。此仕事の間保母は絶へず各幼兒を暗示、補助、批評等によつて最上の活動をするやうに指導する。

或者は動物に食物をり又掃除する。或者は植物に水をやる。或者は次のやうな材料を使用する。

積木、砂、書物、人形、粘土、鉛筆、クレオン、ペーパー、木片、布片等

積木……ヒルの積木、他の小さき積木、人形、椅子等積木は自分で取り出し自分で片づける。

多くは自ら團體を作り、リーダーを選んで作業する。一同で目的を定めてから仕事にかゝる。製作物の主なものは

家、病院、店、要塞、ボート、車、汽車

等である。

玩 具

木栓と板 穴に色をつけた木栓をさして一定の配列をする

珠數玉 各種の色ありて糸にさして色の排列

歐米の保育狀況

タイル 大きなセメントタイルの並べ方、色々に排列して模様を作る

色立方體 模型に従ひ又創作的に種々に組立てる

砂遊び

砂箱、白砂、砂、木サジ、計量カップ、木の玩具(汽車、動物、介殼等)

粘土細工

砂遊び 粘土細工は我國と大體同じ

木工

室の一隅に一個の細工臺ありて、材料としては色々の長さ及廣さの半インチの柔き松板、軸及びテーブルの脚等を作る爲めに長い木を用ひ、道具としては、ハンマー、鋸、メートル箱、錐、カスガヒ、丁規、ネジ廻シ、サンドペーパー等を備ふ。僅かに細工臺一個と小數の道具なれども、一齊的に取扱はないから十分之で間に合ふ。個別的取扱は經濟方面から考へても必要である。

木工の製作品の主なものは

簡単な器具(人形のベット、テーブル、イス、腰掛等)

乗物(馬車、ボート、手押車、汽車等)

實用品(箱、本立、状挿し、額縁等)

此等の製作物にはペンキ等で裝飾する。

此材料は餘程實用的で兒童の生活に密接なものがある。

記憶畫では花、家、人、動物、ボート、汽等の多いのは何國も同じである。

水彩畫を上級に課して居るのは一寸進んで居る。

クレオン畫は、一尺二寸に一尺八寸と云ふ大な紙に畫かして居るのは注意するに足る。

其他、チヨークによる黑板畫及鉛筆畫を課して居る。

裁縫

道具は小さい箱に收めてあつて、針、鋏、ピン、針山、鈕、指ヌキ等である。

人形のきもの、エプロン、ベッドのシート、枕及袋等縫ふて居る。裁縫を幼稚園に課する事が既に實用的である上に、人形のものを作る事は兒童の實生活として誠に有意味のものである。

人形遊び

各種人形、衣服、人形の道具。

人形に着物を着させ又ぬがす。靴をはかす。料理をして飯事。人形をベッドに寝かす。人形を乳母車に乗せて引き歩く等、兒童生活の實際を捕へて然も將來實際生活に資する事となるであらう。

家事

床掃除、卓子掃除、皿洗ひ、人形の着物ベット敷布を洗ふ事、書物の整理、エプロン洗濯及コテかけ。アツプルン
ースを作る事。バタ及アイスクリーム穫作等の作業がある。女子には適切な材料であると思はれる。

其他

紙細工(切抜、折紙、厚紙細工)等あれど、大體我國のそれに類似す。

○御話

歐米の保育狀況

言葉の練習は、終日各時間共重要であるが、特に御話の時間は、保姆が十數人を集めて色々の御話をして後、幼児はそれについて質問したり又議論したりする。又簡単な御話を幼児自身にすることもある。

○音 樂

歌ふ事よりも先づ音楽を聴いて耳を練り、情操を味ふ等の方面を重んじて居る。

音楽を聴いてリズムに感應する。此時に身體の運動を伴つて居る、此時の選擇の標準は

一、高き標準の音楽

二、形式調和に於て簡單なもの

三、餘り長くないもの

四、色々のタイプ

各種のタイプの音楽に感應する。

一、高い調子、低い調子

二、時、速い、遅い

三、描寫的の音楽、例へば

シユウマンのウワイルド・ライダー

メンデルソンのミッドサンマー・ナイトドリーム

マクドウエルのウキツチ

四、ダンスの音楽、例へば

ガホツター、ミニユート

唱歌は各兒童入園の初にテストを行ひ、發聲の能力によりて三つに分園して居る。

歌詞の選擇は

- 一、思想及表象が小供らしいもの
- 二、彼等によく理解され、且興味あるもの
- 三、文學上の價值を有するもの
- 四、短きもの

○ラン チ(食事)

前の表に擧げたやうに、此園では毎日十時半頃から、簡単な食事日本で言へば「御茶を入れる」位の程度なもので、幼兒各自に牛乳や、菓子や、果物やを持つて來てそれを食べるのである。此のランチを一の重要な保育材料として居る。此時の仕事物幼時に何を要求して居るかを次に示す。

手を洗ひに化粧室に行く爲に室を數名づゝ横ぎる。

テーブルにつく。

食 事。

室内の冷却器を用ひる事。

食事に用ひた皿を洗ひ、乾かし、直す事。

歐米の保育狀況

靜かに室を通る。

手を洗ふ爲に待つて居る間靜かに立つ事、手を清潔に洗ひ、元のやうに乾かす事に對し段々責任を増す。

正しくテーブルにつく事を覺る。中央に花や鉢植をおく。正しく食事する事、ランチを忘れた兒童に自己の食物を分配してやる。

注意深く冷却器を用ひる事を習ふ。

後片付をよくする習慣を養ふ。

○遊 戲

活動的のもの……自由の飛んだり、跳ねたり、蹴つたり、登つたりする事。

稍組織的のもの……かけっこ、フットボール。

組織立つたもの……各種。

△劇的のもの

自由……汽車遊び、人形遊び、砂遊び、積木、まゝごと。

稍組織的のもの……家事のまね。教會、病人と醫者、鳥、サンタクロース、キング、クエーン、プリンセス。

組織的のもの(下級にはなし)……劇的遊戲に就ては、前の例にても知れるやうに頗る簡單なもので、組織的のものは

最上級(五歳乃至六歳)の組に極僅か初歩のものを行ふのみで、決して無理な事をしない。

要するに此幼稚園では、大分變つた、又有益な體育材料を取り入れて居る事を示したのである。



薔薇の木に、

薔薇の花さく

不思議なけれど

白 秋

高等女學校に幼稚園を附設せねばならぬ

堀 七 藏

一

幼稚園は托兒所とは異り、至極簡単に經營せらるべきものであります。幼兒が通ふ距離の制限から大なる幼稚園、多くの幼兒を收容すべきものが數少く存するよりも、附近の幼兒を收容して保育し得る小幼稚園が數多く存在する方が保育の普及進歩を計る上に於て肝要であります。歐米諸國に於ける幼稚園の發達を見ても簡単に一室をあて、二三十人の幼兒を集めて保育するといふものが非常に多い。我が國でも到る處に簡単な小幼稚園が設立せられて、今後幼兒保育が一層進歩せねばなりません。

二

是等小幼稚園の發達は非常に望ましい所であるが、更にはその前に、高等女學校に小幼稚園が附設せられねばなりません。今日僅かに女子師範學校に練習用として二三組を有する小幼稚園の附屬せる所があるが、高等女學校に附屬せる幼稚園は、至極僅少或は絶無と稱する有様であることを遺憾に思ふのであります。何故に高等女學校に附屬幼稚園がないか。女子師範學校に附屬小學校と共に、附屬幼稚園が必要なることを是認するならば、殆ど同一理由の下に高等女學校にも附屬

幼稚園が設立せらるべきではありませんまいか。

三

論ずるまでもなく、高等女學校當事者も生徒の保護者も、高等女學校の教材として家事科の必要なることを是認するであります。而して家事科の教授が、單なる講義や説明のみで充分であるとなすものは殆ど絶無であります。さればこそ高等女學校に於ては皆な洗濯の實習に必要な設備をなすのである。また割烹實習のために割烹教室や、いろ／＼の器具を豊富に設備してゐるのであります。また是等の設備の不充分なることを家事科擔當教師は恥とし、學校長に設備の完成を希望し、學校長も亦極力家事教授設備に全力を注ぐではありませんか。高等女學校家事科に於て、かくも實習設備を必要となすならば、同一の理由で育児の實習をなす幼稚園が必要ではありませんまいか。洗濯教室や割烹教室、それ等に必要なる設備のため數萬金を投ずる高等女學校で、幼稚園の保育室を二三箇を設け、保母を二三人置くことが左程困難なことでもありませんまい。割烹室や洗濯室に助手を置くよりも、附屬幼稚園を設けて保母を置くことは決して出来ないことでもありませんまい。附屬幼稚園は幼兒を三十人三組だけ置いて、幼兒一人につき保育料月壹圓をとることにしても毎月九十圓、若し月貳圓納付させるとしても毎月百八十圓。そこで保母を月六十圓平均で三人置いても收支相辨ふではありませんか。尤も保育を行ふときには單に保母の給料のみで足る譯ではなく、いろ／＼と費用を要するも、是等は女學校生徒の保育練習のため支出せられるならば、決して不都合ではないのであります。

四

今日私立高等女學校が多數設立せられて居りますが、是等の女學校には必ず附屬幼稚園があつて然るべきものであると

考へられます。單獨に幼稚園を私立に經營するときは、相當經費を要するので經濟上の困難を來すのでありませうが、高等女學校に附設するときは、至極便宜に經營出來ると考へられるのであります。

更に縣立、市立等の公立女學校では必ず附屬幼稚園を有すべきものであり、經營も左程多く支出することなしにすむものであります。小學校に幼稚園を附設するよりも、寧ろ高等女學校に幼稚園を附設することが非常に有意義ではありませぬか。幼稚園を小學校と併置することは、僅かに經費に利益する所がある位であるが、高等女學校に幼稚園を附屬せしむることは單に經營の節約となるのみでなく、高等女學校生徒に保育實習の機會を與へるではありませぬか。

五

高等女學校では保母を養成するのではないから、保育の實習が必要でないかと考へる方がありませうか。成程女學校は保母を養成するものではありません。しかも保育實習は非常に肝要でありませう。女學校では必ずしも裁縫師を養成するのではなく、洗濯屋を仕立てるのでもありません。しかし裁縫を教へ、洗濯の實習をさせるではありませぬか。また女學校では料理番やコックや給仕人を養成するのではないのに、割烹を實習させるではありませぬか。甚だしきは按摩を實習させた、染物屋の眞似をさせたり、下駄の緒を立てたり、小包の包み方で實習させるではありませぬか。是等のことは強ひて教授せずとも既に百も承知、二百も合點といふことが多いのであります。また實習せずともよいものが非常に多いと言はれる位でありませう。事實是等のことの多くは、假に實習せずして卒業したが爲めに不都合を生ずることは稀でせう。家庭の實際に處して一二回失敗しても大なる損害にもなりません。御飯が十回に二三回こけても、また心があつてパラパラでも大なる恥でもなければ、また非常な損失でもありません。また着物の縫目が多少曲つてゐてもまた荒くとも着用するには左程不都合でもありません。所が如何でせう。自分の子供が完全に育てられない婦人では、その結果がどんなであ

りませうか。女學校卒業者が段々多くなるに、子供を持つことが面倒臭い人が多くなつて、無暗に産兒制限だなど論じてゐるやうでは、國家の前途患ふべきではありませんまいか。産みは産んだが産放しでは人間が育ちませうか。犬猫でもその子を愛育するから人間も必ず愛育するであらう。それが本能だとすましてゐられませうか。また長男の甚六と高をくゝつて、長男や長女を育兒の草紙として平氣でゐられますか。それで家族制度も將來怪しくなりませんか。粗製濫造といふ工合に産兒の多いだけが勿論藝ではありませんが、折角産れた嬰兒を立派に育上げ一家のため、また國家のため盡粹するやうなよき人物を育成することが、實に婦人の最大任務ではありませんか。すれば女學校を卒業するものは假りに御飯がたけなくとも差支ないではありませんか。育兒の道に熟達して居れば充分ではありません。勿論家事萬端の知識技能に秀づることは望ましいに相違ありませんが、若し萬事充分を望むこと出が來ないならば、せめて育兒の心得だけでも女學校に於て完全に教授して置くことが、實にその任務ではありませんか。かく考へると、女學校に於て幼稚園を附設し、幼兒を愛する念を養ひ、幼兒を保育するの途を理解せしむることは非常に大切ではありませんか。多少經費がかゝつても、高等女學校には保育の練習所として、幼稚園を附設することが當然で、實に明白なことではありますまいか。

六

フランスあたりでは、高等女學校に附設した幼稚園があり、また幼稚園と連絡して幼兒の世話を練習させてゐる所が少ないのであります。幼稚園が直接女學校の構内になくとも、幼稚園に甲女學校の組と稱するもの、また乙女學校の組と稱するものなどがあつて、その女學校の生徒が交代に一週二回なり、また三回なりといふ工合に保育の練習をなしてゐるものがあります。師範學校に附屬小學校があつて、教授の練習をなさしめるが如く、高等女學校に附屬幼稚園があつて保育の練習にさせることは肝要であり、フランスの如き國民の次第に減少せんとする傾向を有する國では、女學校に於て保

育の練習をなさしめ、幼児を愛護する念を養ふことは國家的に必要な施設でありませう。而して我が國でも今後このフランスの傾向を學ぶ必要は益々大となりつゝあるのではありませんか。女學校を卒業するものが増加することは國家の慶事に相違ないが、爲めに家庭生活を厭ひて、獨身生活をなさんとするものが増加したり、また産兒を強ひて制限したり、更に育兒を好まない風が益々助長せられるならば、國家の前途甚だ患ふべきことではありますまいか。既にスランスの如き傾向を現出してから騒いでも及ばないではありませんか。かく考へて來ると、吾人は高等女學校に於て保育を實習させて育兒の興味を涵養し、育兒の實際的手腕を養成することは實に目下の急務と考へるのであります。従つて高等女學校には洗濯教室、作法教室、また割烹教室の施設よりも、遙かに附屬幼稚園の經營が肝要であると考へざるを得ないのであります。今後我が國の家庭に於ける育兒の改善を促がす上に於て、高等女學校は必ず附屬幼稚園を設置せねばならぬことを主張するのであります。敢へて高等女學校當事者並に文政當局の三省を希望するのであります。

踊雛のいろく

藤 五代 策

雛と云ふことは、鳥が比々と鳴くことが變化したもので 菊とか云ふことになりました。
す。今では、物の小さくて愛らしいものを、雛型とか、雛 昔支那に郭眞と云ふ長者が、三人の美しい女の子をもつ

てゐました。毎日蝶や花やく愛してをるらちに、三人の子供は不圖した病が因となつて、三月上旬巳の日に棺を並べて死んで仕舞ました。村の人々は非常に悲しく思ふと同時にこの日をこの上もない災厄日だと信じて、毎年村内の老弱男女は此の日河の邊にて終日遊んで災害を河に流して所謂厄拂ひをしたと申します。其後時移り星變るに従ひて、此の厄拂の意味はどこへか消え失せて、杯を河水に浮べて遊ぶ洒落の樂みとなりました。之れが所謂蘭亭の曲水の宴の初まりであります。夫れよりだんく變化して終に雛祭とむすびつけられたのです。我邦では、源氏の光君が、自分の雛形をつくりて祝福し、後沖へ流したと申します。或は之れが雛人形の始まりであります。又奈良の法華寺の比々奈會では、綾錦を着せた人形に、供物をなして祝福したことが史に見えて居ります。徳川初期までは、毛氈の上に立ち雛を立て、女の子の遊びとしてをりました。其後京都に座り雛が出来て、立ち雛と相並んで、女の子に愛せられるやうになりました。又一方では皇室を尊ぶ意よりして内裏雛や親王雛なども作られることになりました。續いて

雛 や み (一)



頃から、男子を祝福する端午の節句祭が隆盛に趣くに從ひ、上巳の雛祭もだんく旺盛に行はれることになりました。

以上は雛祭の起原の大要であります。次に私の考案した踊雛の三四種の作り方をお話いたします。

治郎左衛門雛とか、京保雛などの、珍らしきものも生まれ、三代家齊公の時初めて雛祭が儀式的に完成いたしました。其後二十年頃までは大した進展もなかつたのですが日清戦役の終つ

一、みや雛

圖畫用紙を二つに折りて、其の一面に第一圖甲の雄雛を畫いて、缺で切りぬきます。後頭部、肩、脊の周邊のみを貼りつけて、下端の孤狀部のみを前後に膨らむやうに開いて机上に立てます。

今雄雛の一方の肩先を、一寸つけば、暫時間は左右に動くので、子供には面白く感ぜられます。

この雌雛の作りも同様です。

二、かみ雛

圖畫用紙を二つに折りて、其の一面に第二圖甲の雄雛を描いて切りぬきます。次に頭、袖、袴の外周のみを糊で貼りつけ、後、袴は縦に二分巾位に斷ち切りて、ばらばらに作ります。

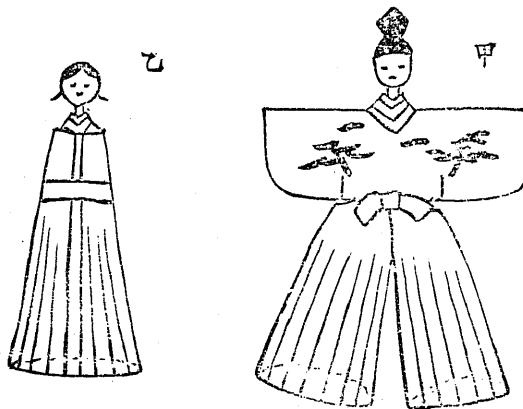
今左手に盆を持ち、その上に此の雄雛を立て、右手にて盆の底をトン／＼た／＼けば、雄雛は、面白く踊り廻ります。

踊雛のいろ／＼

す。

乙の雌雛の作り方も前と同じです。

雛 み か (二)



雪 の 子

ハ調 $\frac{2}{4}$

曲 梁 田 貞
歌 内 海 繁 太 郎

0	5	6	5	1̇	0	5	0	5	5	6	5	1̇	0	5	0
	ユ	キ	ヤ	コ	ン	コ	ン	ア	ラ	レ	ヤ	コ	ン	コ	ン
0	5	4	3	2	1	2	3	4	5	6	7	6	5	—	
	ボ	ク	ラ	ハ	ユ	キ	ノ	コ	ウ	レ	シ	イ	ナ		
0	5	4	5	2	0	7	6	7	5						
	モ	ツ	ト	フ	レ	モ	ツ	ト	フ	レ					
0	2̇	1̇	7	6	5	4	5	0	5	0	5	0	5	0	0
	ズ	ン	ズ	ン	ズ	ン	ツ	モ	レ						
3	3	4	5	5	6	5	1̇	1̇	1̇						
ム	カ	ー	フ	ノ	ー	オ	ヤ	マ	モ						
1	1	2	3	2	3	2	3	5	2	0					
ウ	ヅ	ー	メ	ー	テ	ー	シ	マ	ヘ						
3	3	4	5	5	6	5	1̇	1̇	1̇						
コ	チ		ラ	ノ	ー	オ	ウ	チ	モ						
1	7	1	2	1	6	5	4	3	2	1					
ウ	ヅ	ー	メ	ー	テ	ー	シ	マ	ヘ						

○ 歌 曲

表 情 遊 戯 雪 の 子

表 情 遊 戯 雪 の 子

振 作 作
付 曲 歌

土 梁 内
川 海
三 田 繁
郎 貞 太 郎

雪やこんく
あられやこんく
僕らは雪の子嬉しいな
もつとふれ
もつとふれ
ちんちんちんつもれ
向のお山も
うずめてしまへ
こちらのお家も
うずめてしまへ
雪やこんく
あられやこんく
僕らは雪の子嬉しいな。

ゆきや……左足一步左へ上體を少しく左上に引き伸ばす如

くす

こんく……顔を左上に向け兩手を斜左上方にあげて、手

頸を回轉すること二回

あられや……ゆきやと同じことを左方に行ふ

こんく……顔を右上に向け兩手を斜にあげて 手頸を回

轉すること二回

ぼくらは……右足を左足に揃へ兩拳を握り兩側より胸前に

揃へ少しく脇を張る

雪の子……一跳躍兩足を開くと同時に兩拳を左右側斜下方

に張る

うれしいな……兩手先きを口の處に持ち來り掌を向ふに向

け兩脇を少しく高く左右に張り 左肩を下げ右上

を見つゝ左へ三步「な」にて兩手を自然に左右に

開く

もつと……右足を斜右前方に出し體を其方向に伸ばし兩手

を斜右上方にあぐ

ふれ 兩手を内方より外方へと二回振る

表情遊戯雪の子

もつとふ ……同じことを左方に行ふ

ずん……兩手を前に掌を下に兩踵をあぐると共に兩手を柔

かにふわりとあぐ

ずんずん……左足を引き 蹲踞すると共に兩手を下ぐ

つもれ……立つと共に兩手を靜かに上げつゝ少しく左右に

開く

むかうの……全生手をつなぎ(軽く)左上方を見つゝ左へ

四歩

こやまも……左足更に一步左へ出しつなぎたる手を其まゝ

斜左上方にあぐ

うづめて……兩手を右下に送りつゝ右足を後方に引くと共

に蹲踞し上體を左下に伏せて左下を見る

しまへ……立ちて正面を向きつゝ足踏三回

こちらの……「むかうの」と同じことを右方に行ふ

おうちも……「こやまも」と同じことを右方に行ふ

うづめて……兩手を左下に送りつゝ左 後方で引く共に

蹲踞し上體を右下に伏せて右下を見る

しまへ……前の「しまへ」と同じ

九九

雪やこんく
あられやこんく
ぼくらはゆきの子
うれしいな……前に左方に行きたるを最後の此の時は
……前に同じ

右方へ行き 右肩を下げ左上方を見る
「な」は延聲記號あり こゝは兩手を始めのより
更に大きく開く

妙な子守唄

金子彦二郎

行けどもく果てしなくつゞく木曾路の檜原の傍を、と
ぼくくと辿つてゆく一人の坊さんの姿が、紫色に暮れかゝ
る春の夕暮の中に浮かんで見えます。墨染のお衣に網代笠
汚れた白い風呂敷包を右肩から左の脇へと斜に背負ひ込

んで、つく杖さへ重たげな風情。
もう日は沈んでしまつて、夜の灰色の翹がだんくんと身
に迫つて來ます。坊さんは小手をかざしたり、足をつまた
てたりして、前後左右の眼の届く限りを、物でも探すやう
な熱心さで見やりました。泊めてくれる宿がほしかつたの
です。しかし、其の眼に入るものは薄曇つた空と、蒼白い

夕霧をすかして見える樹立と山だけでありました。しようことなしに坊さんは、傍の大きな石に腰を卸して、うなだれながら、「さて今夜はどうして過したらよからうか。何里四方人の家一つ見えず、人の子一人姿を見せない深山で、野宿をするもよいけれど、どんな恐しい熊、狼が飛び出して来ないものでもなし、と言つて今更もと来た道を引返すといふわけにも行かない。それにお腹も空いて来たし、ぞく／＼寒さも感じて来た。十数日の旅疲れで足ももう言ふことをきいてはくれない。あーあ」と思はずため息をついてゐました。

あたりは次第々々に暗くなつていつて、今はもうお衣の色と區別のつかないほどになつてしまひました。

二

空腹と疲れと心細さで氣を失ひさうになつてゐた坊さんは、突然夢からでもさめたかのやうに、すつくと棒立ちになつて、うろ／＼とあちとあちこちを見廻はし、そして利き耳を立てました。

「ハテ、今のカチ／＼といふ音は、たしかに燧石を打合せる音に違ひない。カチ／＼山の白鬼が今の世に出て来ようとは思はれぬ。たしかに人が通りかゝつたのに違ひない。だが、夢であつたらうか。」

と半信半疑な坊さんは、手の甲をチクリと爪つて見たが痛かつたので、なほも目を見張つてあちこちを見廻してゐると、物の二十間ばかりもへだたつた檜林のはづれに、まだカチ／＼／＼／＼といふ火を磨り出す音がして、黒い人影と共にチカ／＼と線香花火のやうな火の閃きさへ見えたのでありました。「たしかに人だ。」とかう見定める否や、坊さんは我を忘れて「モシ／＼」と叫びながら、其の方へ駆け出しました。「地獄で佛に逢つた」とは此の時の坊さんの心持を言つたものでせう。

だが、この籤から棒の飛び出し者に驚いたのは、先方の人です。

「やつ！」

と言つたまゝ、暫く立ちすくんでゐましたが、やがて、それが紛れもない坊さんの形と見届けるや否や、

「やい、こん畜生、今日は坊主に化けて來やがつたな。もう／＼おのれのやうな山猫にばかされるもんか。」

と言ひながら、手にしてゐた大きな棍棒を拾ひ上げて「寄らば打のめさう」といふ身構へをしてゐます。併し坊さんはそんなことには委細構はず、無人の山奥で人に逢つたうれしさから、一生懸命に

「モシ／＼。お願申します。この奥山で道に踏み迷うた旅の者です。どうか村里へ出る案内をして下さい。これこの通り。」

と手を合せて拜むのでした。さうかうしてゐるに、やつとそれがほんたうの人間であることを知つた先方の男は、「わしは又、すつかり山猫の奴が化けて出やがつたのだと思ひましたよ。いやびつくりした。」と言つて、振り上げてゐた棍棒をおろしました。

三

坊さんは、其の山男に伴はれ、其の住家へと急ぎました。さうして路々問はるゝと、自分の素性や用向など

を話しました。それによると、この坊さんは北國の或寺の住職であるが、今度三百兩といふ大金を持つて、上方の御本山に寄進に行く途中であるとのことでした。

此の正直な身の上話を聞いた山男は、もうすつかりまつ聞だから、もとより坊さんの目にはとまらなかつたが、急に目を光らして、ひとりニヤ／＼とうす笑ひを洩してゐました。

四

二人が辿りついた家は、そこから十町ばかり行つた處にある立派な構への家でした。こんな所にも住んで居られるかと思はれる程の山奥なのに、非常に立派な建て方の家が其の隣にももう一軒ありました。つまり二軒しかない山家であつたのです。内なども大そう頑丈に出来てゐて、いかにも物々しい構へでありました。

山男が門番と何やら笑ひながら、ヒソ／＼話しをする門番が、

「さあ、どうぞ。」

と言つて小戸を明けて誘ひ入れながら、ジロリと凄い目で坊さんの顔を見ました。坊さんは此の時、「何だか薄氣味わるい人がゐるな。」と思ひました。

五

空腹と疲勞とで弱りきつてゐた坊さんは、思ひがけなくよい人によつかつて、其の夜いろ／＼と食べあまる程御馳走を頂戴して、やがて曲りくねつた廊下を案内されて、奥の四疊半に参りました。そこには又實に見事な夜具蒲團が備へつけてありました。坊さんは久しぶりで柔い上等な夜具の中で、思ひきり足を伸して眠ることの出来るのが嬉しくてたまりませんでした。案内した男は、「御用心のよいやうに鍵をかけておきます。明朝はお起しするまでゆるりとお休みなさい。」といつて、外からピンと錠を下して引取りました。

すつとはなれた茶の間の方では、時々數人の男の高笑ひがしては、又何やらヒソ／＼聲をひそめて話し合つてゐる様子でありました。

妙な子守唄

坊さんは、いつの間にか、ぐつすり寢込んでしまひました。

六

鼠の騒ぐ音一つしない眞夜中に、火のついたやうに啼き叫ぶ赤兒の聲に、坊さんはふと目を覺されました。と言つても、また實はうと／＼した、おぼろな覺め方でしたが、少し落ちついたかと思ふと、又ヒ／＼泣き出すので、坊さんの目はだん／＼はつきりしかけて來ました。坊さんの耳には、今度、赤兒の啼き聲と一緒に、一生懸命に其のむづかる兒をなだめずかしてゐるらしい子守唄が訪づれて來ました。子守唄の調子には何の變りもありませんが、「所かはれば品かはる」とは言ふものゝ、噴飯したい程をかしいのは、其の唄の文句です坊さんは、もうすつかり目が冴えてしまひました。子守唄が餘りに風變りなのに興味を引かされて、その歌の文句を述つて眞似て見ました。

又一しきり赤兒は、お腹でも痛くて居堪まれぬと言つたやうに啼き出しました。すると前よりもつと力強い聲で件

の變な子守唄が歌はれました。

「りんかじんと、ががじんと、りよそうせつすとごんすが、くさのあたまたのさうかうとり、やまとやまとがかさなりて。」

變な子守唄といふのは、かういふのでした。坊さんは夜着の襟に顔を半分埋めて、ぶつと笑つて見ました。が、その面白さに釣り込まれて、二度三度繰返してゐるうちに、何だか其の唄には特別の意味が籠つてゐるやうに、ふと氣がつき出しました。

りんかじんとががじんと……………

とかう口誦んでゐると、流石に學問のある人だけに、「ハテナ、『りんかじん』とは隣家人でお隣りの家の人といふことだな。さうすると『ががじん』は「我家人」で我が家の人だ。……………うむ、其の次は何だつけない、あゝさうく、『りよそうせつすとごんするが』なに、「りよそう」と言ひや、旅僧即ち、旅の僧さんで俺のことぢや。「せつす……………」といふ一條が「旅の坊さんを殺すと言つてゐるが」といふ謎であると分つた時、今まで面白をかくしく思はれてゐたあの妙な

子守唄が、急に腦天から冷水でも浴びせかけられるやうに恐しい鯨波の聲に聞えて、坊さんは思はずぶるくつと身ぶるひして、床の上に起き直りました。

さうして薄ぐらい窓明りで部屋の様子を調べて見ると、

どこもこれも非常に頑丈に作りなされて、いかにも曰くがありさうな構へです。……………と坊さんの頭には、夜道で逢つた男や、門番の男の一癖ありさうな面構へや、氣味わるい薄笑ひから、見知らぬ旅人の自分に、行届かぬ所のないやうなもてなしぶりや、さては「ゆつくりお休みなさい」と言つて、外からピンと錠をおろしていつたことやが、みんな恐しい人達の恐しい計らひであつたと氣がついたのであつた。さう思ひ出すと、氣のせむか、その部屋も、會てやはりそこで命を取られた人々の血で、血腥い匂さへするやうに思はれ出した。さうかうしてゐるうちに、茶の間の方から、磨ぎすました出刃庖丁でも提上げた山賊の親分たちが、ミシリく〜と近寄つて来るやうにまで思はれ出して來た。「あゝ、どうしたらよからう……………」と心も身に添はず只、おどく〜してゐる時、妙な子守唄がまた聞えて來た。

「おゝ、さうだ、あの歌のおしまひの方をまだ考へて見なかつた」と氣がついて、「くさのあたまのさうかうとり、やまとやまとがかさなりて」といふ謎の文句を案じて見ました。するとそれは「草の頭の艸冠を取れば、「早く」だし、「やまとやまとが重りて」は、山と山と重ねると「出」といふ字になることがわかりました。「早く出よ」といふことは分りましたが、こんな嚴重な構から、どうして逃げ出せよう……しかし、あゝ言つて親切に教へてくれるからには、何とかして逃げ出せる道があるのかも知れない。とにかく愚圖々々しては居られない、と帶をしめ直して立上つた坊さんは、金綱の陥穽にかゝつた鼠が、あちこちと鼻先で小突き廻つて活路を求めるやうに、入口の扉を押して見たり押入を明けて見たり、窓の格子の棧を小突いて見たりしましたが、どこにも逃げ道は見つかりませんでした。

がつかりして、一時氣を失つたやうに茫然としてゐましたが、「どうせ殺されるんだ。一つ、死ぬ覺悟で思ひ切つて一つ打毀しをやつて見よう。」と決心がつくと、今度は死物狂ひで、窓格子の棧に手をかけて、うん／＼押したり、ぬ

ぢつたりして見ました。

命がけの熱心ほど、怖しいものはあまりません。一寸角の窓格子が、暫くの後、とう／＼この坊さんの瘠腕で、一本外れたのでした。鬼の首でも取つたかのやうに、喜び勇んだ坊さんは、これも佛様のお冥助と報謝のお念佛を口にしたがら、尙勢込んで其の隣の格子に手をかけました。かうしてたうとう三本だけ窓の格子を抜き取りましたら、窮屈ながら、どうやら體が通りさうに思はれたので、三百兩の大金の入つた胴巻だけを身につけて、やつとの思ひで死の牢獄を脱け出しました。

庭先に飛び下りると、子守唄を歌つてくれた、救ひの主の方に向つて掌を合せて、他所ながら御禮の心を捧げ、さて裏庭に廻つて、木の枝を傳つて高擧の上に手をかけました。

この時です。もう袋の中の鼠だから、どんなに大きな聲で話しても逃げる氣遣はないと慢心してゐるらしい二人の男が、

「うまく行つたね。あの坊主の胴巻の三百兩が、そつくり

頂戴出来るんだ。」

「さう〜。この頃の不景氣には、實は少々うまい酒も飲めなかつたんだが、いや、捨てる神があれば、拾はせてくれる坊主もある。まあ、あそこに押込んでおきさへすれば、急ぐことはない。たかく坊主の一疋ぐらゐ、ゆつくりと仕事に取りかゝるとしようぢやないか。今夜は久しぶりでよく酒がまはつた。」

「それもいい。だが俺は早くその三百兩の小判大判の額が拜みたくなつたよ……」

など、語り合ひながら、身仕度にも取掛つてゐるらしい氣配がしました。

坊さんは、もう生きた心地もなく、その高擧を乗り越えようと、後をも見ずに、又方角も考へずに、足に任せて、どん〜、山よし、谷よし、草原よし、駈けつゞけました。

夜がほの〜と明けかゝる頃、蹠足^{はだか}を傷だらけにした坊さんは、やつと麓の村里に辿りつきました。さうして、その旨を早速土地の代官様に訴へ出しました。

七

數日の後、幾十人の豪傑達からなる一隊が、その坊さんの案内で、この山賊どもの住家へ押し寄せて、頭から子分まで残らず搦めとつてしまひました。さうして、それ〜お處刑を申渡されました。只一人、其の夜妙な子守唄を歌つて、坊さんの危険を救つてくれた女だけは、代官様から手厚いお褒美と共に、おほめのお言葉さへ頂戴したのでした。その女といふのも、やはりこの山中を通りかゝた旅の者であつたのですが、山道に迷つてこの宿に紛れ込み、身についたすべての財物を取り上げられた上、そのまゝ乳母として召使はれてゐる氣の毒な女なのであります。この乳母は、その家を山賊の住家と知らないで泊り込んで、氣の毒にも金や命を取られてしまふ人達を、何とかして救ひたいと思つて、眞夜中になると、わざと赤兒をつねつて啼かせ、それを寝つかせるのに事よせて、妙な子守唄を唄ひそれとなしに危険を知らせてゐたのですが、今まで誰もそれと氣のつくものがなくて、みんな哀な最期を遂げたのに

その坊さんだけが、よく唄の意味を悟つて、遂に山賊退治の手引きをしてくれたのでした。

代官は乳母のよい心掛と頓智とにめで、其の家やら財産やらをそつくり乳母に與へました。乳母は大そう喜んでそこに茶店を開いて、北國筋から上方へ、上方から北國筋へと往き來する數多の旅人たちを、心から慰めねぎらつて

やりました。

信濃の木曾路に、昔、名高い姥が茶屋といふのがあつたといふ。その茶屋は今も残つてゐるかどうかは分らないが乳母が機轉の子守唄の妙な文句だけは、いつまでもく悲しい涙つばい餘韻を傳へていくことでありませう。

(一四・二・二八)

幼 兒 の 眼

東京女高師附屬幼稚園

一
幼兒の眼、題目は如何にも面白く考へられるが、茲では寧ろ衛生的の立場から、家庭や幼稚園保育者の參考資料として、事實を出発點とした、注意について述べる考へです。

といふのは、去る二月當附屬幼稚園の入園檢定に於て、身體檢査の結果の事實です。檢定人員男兒が合計九十八人、女

兒七十一人でありますが、是等幼児百六十九人につき、眼科員が検定せる結果についてこの考慮が肝要です。
 今検定の結果を表にすると左の如くなるのです。

検定人員 合計一六九人

	男 兒 (九八)	女 兒 (七一)	計
正常なるもの	八人	七人	一五人
濾胞性結膜炎	六二	五〇	一一二
トラホーム(トラホームの疑あるもの)二〇		六	二六
上瞼結癍痕	一	〇	一
單性結膜炎	六	四	一〇
顆 粒	五	六	一一
治療を要するもの	一三三	一二	三三
水泡性結膜炎	一	〇	一

二

右の表を見て驚くべきことは、五六歳の幼児には正常なる眼を有するものが甚だ僅少なることです。百六十九人中正常なる眼を有するものが五人であるから、約八・五%しかないことは驚くべき事實です。假りに眼科醫の検査が嚴密であつたとしても、兎に角正常の眼を有する幼児の僅少なることは誤りなき事實でせう。

之に反して濾胞性結膜炎が男兒六十二人、女兒五十人、合計百十二人はあまりに多に失する。百六十九人中百十二人で

は六十六%強、それに單性結膜炎や水泡結膜炎を合して百二十三人とはいふべきも兎に角事實です。

更に父母が驚かれることは、トラホーム又はその疑のあるもの、顆粒の存するものを合計して三十七人。この中には濾胞性結膜炎であるものもあらうし、トラホームとしても極く輕症のものも多いには相違ないが、事實に於て三十七人もあることは團體生活をなす家庭に於ても、幼稚園に於ても、相當の方法を講ぜねばならぬ。勿論全く傳染性を缺くものが多いにしても、成るべく速に治療せねばならず、また傳染の豫防法をも講ぜねばならぬ。或は幼稚園として入園を許可せぬことは、他の幼兒に傳染せしめない豫防として是非考慮せねばならぬ條件かも知れぬ。

三

幼兒の眼、單に可愛いと稱して見てゐる譯には行かぬ。普通の家庭では、幼兒の眼が血をはいたやうに赤くなつて居るときとか、眼脂で眼瞼の開かぬとき位の外は注意せぬ。泥のついた手指で眼をこすつたり、いろ／＼の異物が眼に入つてこすつたりすることの多い幼兒の眼について、あまり冷淡でありはせぬか。幼稚園の保育に於ても充分注意せねばならぬ幼兒の眼である。不注意のため眼疾が甚だしくなり、不治の盲目にならぬとも保證し難いではないかと考へると、家庭に於て幼兒の眼を時々硼酸水で洗滌してやること位は必要ではないか。幼兒が喜んで硼酸水で洗はせぬに相違ない。顔さへ満足に洗つてやらぬ、幼兒だから中々六ヶ敷いとすましてゐることがよくない。一體からいへば幼兒の顔は一層よく洗つてやらねばならぬ。その際特に眼に注意せねばならぬものと考へる。

世の母親たちが幼兒の服裝に注意せられる以上に、幼兒の眼に注目して貰ひたい。睫毛の長短を論ずる前に、幼兒の眼の衛生を考慮して頂きたゞ。

群馬縣保育會第二十六回總會情況

森 島 順 之 助

一、當保育會の特色

我が保育會は縣下全部の公私立幼稚園の集團にて、保育上の研究機關として創設せられたもので、年を経ること十餘。回を重ねること二十六。其の間幾多の辛苦困難と戦はれしかは想像に餘りある。然も能く不屈不撓以て今日の盛運に向ひ得しは、全く會員諸氏が融合せる情味と、隔意なき意志表示の賜ものといへ、主として副會長たる黒崎桐生幼稚園長、幹事たる三橋高崎幼稚長、更に顧問格たる戸谷伊勢崎助役等の統率其の宜しきを得たるものといはねばならぬ。今や其の第一期戦は幸ひにも凱歌を奏し得て、基礎こゝに定まり、將に第二期戦に入るの盛況となりしことを喜ぶものは獨り老生のみにあらずと思ふ。

本會の特色ともいふべきものは、會場が各幼稚園を巡回することである。「此土地の狀況に於て、此の設備に於て、此の保育振りは」といふ處に、言ふにいはれぬ甘味があると ぶ。今一つは經費を全部會員の負擔とし、厘毫も他の援助を受け居らぬことである。所謂獨立獨歩で、従つて他に對し何の遠慮をも要しないことである。

二、當日の情況

時は二月十五日午前九時より、近く落成した前橋幼稚園片貝分園に於て開催せられた。折からの寒風を冒され、遠き館林を始め、會員一同殆ど缺席なく定刻迄に集園された。來賓としては群馬縣視學、女子師範學校長、前橋市助役、學務主任市内 學校長等であつた。

一、參加幼稚園

高崎幼稚園、伊勢崎幼稚園、桐生幼稚園、明照幼稚園、館林幼稚園、澁川幼稚園、清心幼稚園、前橋幼稚園、
愛國婦人會群馬支部幼兒托兒所、前橋幼稚園本園分園

一、事業の概要

1、保育の實際

(一)會集 挨拶 雪やこんく 金太郎 雀の學校

(二)櫻の組 遊戲

〔甲の組〕 おぢぎ(律動) たこ 落葉のおどり 鬼さん

〔乙の組〕 兵隊 律動 流れ星 鬼さん 紅雀

菊の組 積木(共同) 三組に別ち

出來上りしもの(汽車) (橋) (テーブル椅子)

(三)全體を二組とし場所取り遊び

2、質疑 應答

群馬縣保育會第二十六回總會情況

(一) 新築園舎及び設備につきその意見發表あり

(二) 保育實際につきの批判

イ、幼兒に對する態度は感激の態度でなければならぬ。この點より見てよろしかつた。

ロ、遊戯は幼兒の心理に合致したものでなければならぬ。この意味より見て「流れ星」の如きは如何のものか。

ハ、動作は體育的に考へられて居てよろしい。

二、輪取遊び、鬼さんこちら等は活氣があつて運動量も多く、且つ幼兒の好みに合致してよかつた。

3、選 舉

會長缺員に付菅原師範學校長を推薦す。

4、講 演

(一) 菅原會長

保姆の自己修養はやがて幼兒に偉大の感化を及ぼすものなること。

(二) 狩野前橋幼稚園醫

幼兒のかゝりやすき病ひに付其の豫防と治療法を詳細に演ぜられた。

(三) 塚越群馬縣視學

體育と情育とにつきて。

5、議 事

來る四月上旬を期し、遊戯講習會を開催することに決す。

6、次回開催地

伊勢崎幼稚園に開くことに決す。

7、遊戯交換

時間の都合上次回にゆづる。

附屬幼稚園だより (一)

一、入園志願

二月一日から十日迄 募集廣告を出して置いたところ、入園志願者男兒八十二名、女兒百十九名、臨時補缺募集の分、男兒三十九名。この内第一部第二部で男兒は約四十五名、女兒は四十名(臨時補缺の分は十名)を許可すべき筈である。

そこで二月十三日抽籤を行つて検定候補者を定めた。抽籤は例によつて眞鍮棒に番號を附せるものを志望者數だけ筒に入れ、蓋をして錠を下して抽籤器から、一本づゝ出願順に引出すのであるから、至極器械的であり、また公平な

ものである。誰でも一度抽籤の有様を見た人は、その公平なることを疑ふことが出来ない。しかし運を一本の籤にかけてゐることであるから、抽籤場に於ける光景は、悲喜こも／＼で、何となく氣の毒な感がする。

抽籤によりて第一部男兒は六十二番まで、第二部男兒はそのあと八十二番までとなし、女兒では第一部は五十番まで、第二部は三十番までと定められた。尤も第一部で候補者の権利を得たものが第二部にて重複した場合は、實數三十人となるまで三十番より下ることにしたのであるから、今年は偶然にも十五人も重複して、結局四十五番までが候補者となつた。

是等の検定を受くることの出来る候補者につき、心身の發育狀況を検定した。それが二月十六日より四日間續いて行はれた。何れ満四歳の幼児であるから、父母の附添で検定を受けるのであり、検定といつてもいろ／＼の遊びをなす間に行はれたものであるが、中にはイヤだと駄々をこねて、父母を困らせぬものも數人あつた。一人が泣いたためにそれが傳染するといふ傾向もないではないが、多くは我儘育の者であるらしい。兎に角検定の結果について評議せられ、この四月より入園を許可せらるべき幼児は

第一部男兒 三十五名

第二部男兒 九名

第一部女兒 二十四名

第二部女兒 十七名

臨時第一部男兒 四名

臨時第二部男兒 六名

である。是等の發表は十九日午後一時半であつた。喜んで父母もあり悲しんだ父母もあつた。臨時募集と稱するは大正八年四月二日より大正九年四月一日までの六生、即ち滿

五歳男兒で昨年入園せるものゝ補缺である。毎年補缺がある譯でない。

二、入園の注意

二月二十七日午後一時半から検定の結果、入園許可の通知を受けた幼児の保護者を集めて、主事及び保母から入園の準備に關する細大の注意を説話した。是等の大要並に檢定に關する調査事項は追つて發表する機会があると思ふから茲には省略する。

三、雛祭

三月三日は雛祭り、幼児にとつては誠に楽しい幼稚園行事の一。當幼稚園では大震災火災の際、多くの雛様を焼失したので今は一もない。昨年は小石川の帝國女子専門學の二教室を借りて假幼稚園を實施してゐたのであるから、雛祭どころの話ではなかつた。所が昨年四月は現在の新校舎、バラックといふも、兎に角新しき、しかも古き校地に歴史ある地に歸つた。それ以來いろ／＼新しき設備の途上で、

また雛様を購入する運に至らないが、幸に父兄の有志から寄贈せられた雛様を修繕して飾つた。しかし幼児にとつて新しくとも古くとも彼等の雛様、幼児の雛祭として喜んで一日を愉快に過す準備に忙かしいところ。

四、視 察

新庄保母並に大野保母の兩人は、命によつて京都、奈良、大阪の二府一縣へ幼稚園保育の視察に出張した。二月十四日より四泊五日の旅行。關西幼稚園の状況を視察して得る所が大であらう。參觀の便宜を與へられ、いろいろ指導せられたる方々の御厚意を謝してゐます。

五、幼兒終了

三月二十日まで幼兒は幼稚園に出席。それまでの間に學年末の會をなす豫定。何れいろ／＼幼兒のお話や遊戲の催をなす。また實習科生徒の作業も加る筈。

三月二十五日には幼稚園の修了式舉行。二十六日より四月七日まで休業。四月八日午前九時より新しく入園する幼

兒を加へて百六十餘の生活作業が開始せられる。

六、保育實習科

この三月二十七日に修了する保育實習科生徒十七名、目下それ／＼就職の交渉。若き保母諸君の前途洋々。

更に四月より入學する保育實習科生徒約二十名は二月中募集。全國的に、何縣からでも志願し得ることになつてゐる。是等の志願者につき履歷書身體検査書等につき選抜決定する筈で、所謂入學試験はない。不日その結果が發表せられるであらう。(三月一日稿 醫峰生)

○受験幼兒の感想

姉「陸子さん 今日どこへ行つて來たの」

『お茶の水幼稚園』

姉「どんなことがあつたの」

『先生と遊んで來たの。あしたまたいくわ』

姉「あした 行つてはいけないでせう。もうしばらくたつ

てからね」

「先生が五人これだけゐてね（五本の指を示し）これだ

けが男の先生よ（四本の指を曲げ小指を示しつゝ）

兼 ち や ん

東京女子高等師範學校教授 岡 田 美 津

第四 病氣の兼ちゃん

吉藏は夕飯をすまずと、

「行つて用足しをしてお出で。おれが兼公を見てゐてやるから。」と言つた。

「兼坊に口をきかせてはいけませんよ。」とお芳はいつて起ち上り、皿や鉢を音させぬやうに食卓から流し元の方へと運び

「昨夜はちつとも眠らなかつたのに今日はお晝後にすこしとろツとした位だから。ぐつすり眠るといゝんだが可哀さうに。だからなるたけ靜にさせておいて下さうよ。」

夫妻は小聲で話しあつてゐた。

「今夜はすこし快い方なのかな。」と夫は氣遣はしさうに訊いた。

「あゝ、すこしは快いんだよ。だけどお前さんが今日持つて歸つて來た七面鳥卵を食べる段にはなつてゐない。」

「食べさせたら力がつくかと思つたんだがな。」

「そうだけれど。あの卵が消化出来るようになったら……食べさせてやるよ。」

「あゝ」と吉藏は愛想よくいつたものゝ、つまらなさうな顔をしてゐた。

「お前さんかくしに甘いものを仕舞つてありやしまいね。」とお芳は皿を拭きながら夫の顔をじつと見て、急に理由ありげに尋ねた。

吉藏はきこえぬ振りをしてゐた。お芳は穩かにしかし斷乎とした調子でもう一度問ひかへした。

「たゞネ菓^{なつか}の實がすこしはいつてるんだ」と吉藏はやつと答へた。

「ぢやね、あの子がそんなものが食べられるやうになるまで私が預かつておかう。」

「今夜は兼公に一つだつてやりやしないよ。」と吉藏は困つたらしく言つた。

「それあ分つてるよ。」

吉藏は情なささうに笑つて戸の傍に引かけてある外套を指して、

「あのかくしから出すがいよ。」

「お前さん、自分でお出し。」とお芳は答へて「そしてその料理臺 小抽斗に入れてお置きなさいよ。」

「困つた女だな。」

「困つた男だよ。」

「さうかもしれねえ。」

「お前さんはね。ずいぶん、ものゝよく解るひとだが兼坊のことゝいふとまるで子供なんだもの。」

「ほんとにな。」と吉藏はおとなしく同意した。

「だからお前さんに氣を付けてゐなくちやならないんですよ。」とお芳は優しく言ひ添へた。
しばらくしてから、お芳は、

「ちや、兼公を靜かにさせておいて下さい。お頼み申しますよ。私や永くはかゝらないから、そして歸りに千代ちゃんを連れて来よう。橋本のおかみさんは一日千代坊を預かつてくれてさ。あの人も親切だね、坊やはこの節、中々言ふ事をきかなくて、兄ちゃんが病氣なんだからついても解らなくつてね。」

お芳は、兼ちゃんの床を一寸覗いて見て、出掛ける支度をした「丁度よく眠つてるよ。」と嬉しさうにこゝろした。
たつた一人になつて、吉藏は爐の前で一服やりながら考へてゐた。二分程すると、

「お父ちゃん！」といふ聲がした。

「眼が覺めたのか。」と吉藏は跳び上つて、パイプを置いて床の方へ歩みよつた。

「お父ちゃん、あたい何故棗のお菓子たべちやいけなの。」

「そ……それはな、お腹にわるいからだ。」

「だつて、あたい頭が痛いんだもの。」

「お前に、何か言はしちやいけねいつて母ちゃんがいつてたぜ。さ、靜にしてな、いゝ子だから、ねんねしな。」

「ねられないんだよ。頭が痛いんだ。棗が欲しい。」

父親は子供の頭を軽く撫でたり、肩 あたりを叩いてやつたりした。

「可哀さうにな。水でも飲ましてやらうか。」

「あたい、棗が欲しい。」

吉藏の眼は子供から離れて臺所中を見廻はしてゐた。料理臺の小抽斗が少し開きかつてゐた。

「ねられないよ。あたゝい藁がほしい。」とまた兼公が言ひ出した。

吉藏は吐息をついた。そして小抽斗をつくくくと眺めてゐたが急に我と我身を引締めて、兼公に、

「藁はやるわけにいかないよ。」と氣の毒さうにいって「お話をしてやらうか。」とほとんど困りぬいたといふ風でいつてみた。

「あゝ」と兼公が氣が乗らない聲で「藁が……」

「何の話がいゝ？ 龍の話か。」と父は大急ぎで尋ねた。

「あゝ」と兼公はしようことなしに同意して、「龍の話して……そしてなつ……」

早速に吉藏は、

「むかし〜一頭龍が穴に住んでたんだ。」

「その龍つてどの位の大ききなの。」と兼公はすこし面白くなつたか、問ひかへした。

「それはな、お前が動物園で見たとの獸よりも大きいんだぜ。そして身體中に鱗が生えてゐてな。そして口から火や煙を吐くんだ。だから人間がその穴のそばを通るとプープーと火を吹つけて、その息で焼き殺して喰つてしまふんだ。」

「何故、人間は水を掛けないの。」

「ほんとにな、……何しろ人間は水を掛けなかつたんだ。するとそのくにの王様がな、その人間が喰はれてしまつちや、今に年貢を納めたり王様のお通りの時に萬歳つていつてくれるものも無くなつちまふだらうと思つて、澤山お觸れのかきつけを印刷して市中に貼りつけて、誰でも龍を殺したものは、財産を半分やつて、おまけに美しいお姫様を御嫁さんにするやと仰つたんだ。それで、若い殿さま達がおれが命がけで龍を殺してみせるつていつて出掛けていつて、みんな龍に喰はれちまつたんだよ。」

「龍を鐵砲で打てばいゝぢやないか。」と活氣づいて兼公がいつた。

「あゝ、だけどまだ鐵砲のない時分たつたから。」

「さうか、それからな。」

「浦團をよくかけて居なくちやごめんだぜ。それからな、何百人つていふ若い立派な男が焼き殺されて喰はれたあとに一人の百姓が出て来て、私が一つやつてみますつていふんだ。するとみんなが笑つてほんとにしねいんだ。今までの人はみんな戦争の出来る軍人さん達だつたんだもの。でもその百姓は腹も立てねいで、刀を一口と盾を二つくれつていつて、それを貰ふと氣樂さうに鼻唄をうたひながら自分のうちへ飯をくひに歸つていつたんだ。ちやんとお腹の中に者がきまつてたんだから。それからあくる朝になると自分たちの牛やら、羊やら、鶏やら、鶯鳥やらをのこらず引出して、龍の穴んとこまで追つていつたのさ。すると龍は七日ばかり立派な軍人さんを食べなかつたんで、ひどく腹がへつてたんだ。だもんで、牛だの、羊だの、鶏だの、鶯鳥だのがやつて來たのを見ると、舌なすめりをして穴から出て來てプープーと息をかけては焼き殺してみんな食べてしまつたのさ。すとお腹がもう太鼓のやうにふくれてしまつたから、一とねむりしようつていつて穴へのそく歸つていつたんだ。しばらく眠つてゐると、その百姓が「こら、起て來い龍の奴め、刺しころしてやるから出て來い！」と怒鳴つてゐる聲で目を覺されちまつたんだ。だが龍が何ともいはなかつたものだから百姓は穴を覗きこんで、刀でもつて龍の眼をグサと刺してそれから……

「龍の眼をくりぬいたの。」

「くりぬかないけれど、ひどく刺したんだよ。すると龍めがまたプープーと百姓に息を吹きかけ始めた。ところが牛だの羊だの鶏だの鶯鳥だのを食べたあとだから、息がきれてゐてうまくいかないんだ。その百姓は盾でもつて龍の火と煙を防いで、も片つ方の眼を刺しておいて「出て來い！ 首をちよんぎつてやるから！」と怒鳴つた。龍は怒つてムーンと唸つ

て百姓を擱まうとしたんだが、何しろ腹はふくれてゐるしおまけに眼は半分見えなから穴から首を出すのが早い、百姓は背のびをして力一杯に刀をふりあげて龍の首を切り落してしまつた。それで龍は死んぢやつたの。それから……

「血が出たの。」と兼公は夢中になつて訊いた。

「出たとも、そして百姓は王様の財産を半分もらつてお姫さまをお嫁さんにしてめでたくくらししたのさ。これで龍の話はおしまふ。」

「も一つお話。」

吉藏はもう二つお話をしてやつたが二つ目の終りになつて兼公が、

「あたい龍のが一番好き。お父ちゃん抱こしておくれ。」

「いけな〜。床を出ちやいなよ。」

「よくくるんで抱いてよ。」

結局父親は負けてしまつて兼坊を毛布にくるんで、臺所をあちこち抱いて歩く事になつた。

「兵隊ちゃんのやうに歩いて。口笛を吹いて……樂隊のやうにね。」

吉藏はいひなり次第に口笛を吹いて兼公がもういよといふまで臺所中を行軍した。

「唱つてよ、お父ちゃん。」

「お前、頭いたくないか。」

「さつきより快くなつた。唱つてよう。」

「よし来た。」といつて父親は子供を抱いて爐の傍に坐つた。

「戸外が見たいな。」

そこで二人は窓のそこへいつて下の往來を見ると丁度街燈が點くところだつた。吉藏は點火夫の歌を小聲に唄つてきかせるとも一つくと兼公がいふので、とうくと五つか六つとどけさまに唱つてやつた。こんどは火のそこへ戻るといふので爐のところへ來ると「ちいさい鳥が……」を唄つてくれるといひながら兼ちやんは父の首に抱きついてしまつた。その歌の節が氣にいつたのか、父がうたひながら體をゆすぶり、片手で兼公の肩を叩いて拍子をとつてゐる間じつとしてゐた。それがすむと少時だまつてゐたがやがて、ものうげに、

「ランプの歌をもう一べん。」

それを父親がおよそ三十回もくりかへして辭にうたつてやつてゐるうちに、兼公はほんとに寢入つてしまつた。

十分後にお芳が眠つてる千代ちやんを抱いて、はいてくるときには吉藏はうす暗がりにぼつ然と座つてゐた。

「坊は眠てゐますの。」お芳が心配さうにきいた。

「ゐるとも。」

「それはよいあんばいだ。私の留守の間に目をさまさなかつたかしら。」

「ほんのしばらく。棗の菓子はやらなかつたよ。」といひくと吉藏は笑つて小抽斗を指さし「だが、やりたくつて困つたよ。」

○みどり會々員諸姉へ

會員名簿を作らうと思ひます。

住所と奉職園名、と氏名(改名の方は舊とお記し下さい)を母校幼稚園内幹事あて、で早速お送り下さいませ。なほ、この雜誌をご覽にならない、お知合の會員がございましたら、そへてお知らせ下さるようお願ひ申上ます。

みどり會 幹事

編輯だより

○ひと雨ごとに木の芽がふくらみ、うららかな日光が鳥を、小蟲をさそつて居る。

窓あけはなして春風を入れ、戸外に出て大空を仰ぎませう。

○雛祭、保育修了式、新學期準備、のびやかな幼児の世界に於ててさへ、そこにある成人の心の多忙なのは三月である。然し快い多忙、吾等はそれを歓迎する。

○「小學校」「一年生」かうした言葉の響に、學齡に達した幼児の心はそのまゝに居られない程の嬉しさに踊り轉ぶ。「その時先生はどうするの?」「やつぱし幼稚園にゐるの?」「いいぢやないか、先生も一處に學萬校行けば、そして一年の先生になれば丁度いいぢやあないの?」小學校への連絡問題が、小學校に於ても幼稚園に於てもお互互成人にとつては長い間の問題である事を思ひ出す。

○群馬縣保育會の状況を早速に御投稿下さつて誠にありがたうございます。引續き他の保育會、又幼稚園其他の御消息をお送り願ひます。

御注意	廣告料	定價表		
		冊數	定價	郵稅
▽(外國行郵稅は一部十二錢の割にて御拂込下さい)	普通面一頁	金四拾五圓	同	同
▽本誌購讀御希望の方は定價表により振替貯金で御送	表紙裏付	金七拾圓	同	同
▽金下さい(東京四六番臺書齋教文書院宛)	表紙前付	金七拾圓	同	同
▽前金切れの節は帶紙に「前金切」と致します。	表紙裏付	金七拾圓	同	同
▽郵券送金の節は教文書院宛御照會下さい。	普通面一頁	金四拾五圓	同	同
▽本誌の一切は教文書院宛御照會下さい。	表紙裏付	金七拾圓	同	同
	表紙前付	金七拾圓	同	同
	普通面一頁	金四拾五圓	同	同

大正十四年三月十一日納本
大正十四年三月十五日發行

第二十五卷第三號

無斷
轉載

編輯者 東京女子高等師範學校内日本幼稚園協會
堀 七 藏
發行者 東京市下谷區上根岸八十八番地
越 元 新 吉
印刷者 東京市京橋區木挽町二ノ三
石 上 文 七 郎
印刷所 教文書院印刷部

發行所 教文書院

東京上野公園寛永寺坂下(上根岸八十八)

電話下谷三〇四七番・一九五一番
振替東京四六一一一番

理學博士 山口銳之助先生
文學博士 藤岡 勝二先生

監修 教文書院編輯部編纂

カーレント學生參考書

最新ポケット型・ポイント活字採用・正價各冊金卅五錢・送料各二錢

現代學生知識の泉源!!

豫習復習受験の要書!!

學生の良師となれ
簡にして要を盡せ
確實にして權威あれ
學習に興味あらしめよ

これが本書編纂の
モットーである。

近時諸種の學生參考書が續々と出版されるが、不備不正
確なものも多く、學生諸君をして其選擇に迷はしめるは
吾人の最も遺憾とする所である。吾がカーレント參考書
は特に是等の點に着眼して前條のモットーに基き、理學
博士山口銳之助、文學博士藤岡勝二兩先生監修の下に、各
々専門家を分擔し銳意完成したる模範的良參考書にし
て、豫習、復習、受験に必要缺くべからざるものである。

西 洋 史	日 本 史	代 本 數	幾 何 學	化 學	物 理 學	外 國 地 理	日 本 地 理
上下二冊	上下二冊	上下二冊	上下二冊	上下二冊	上下二冊	上下二冊	上下二冊

算 術	生 理 學	鑛 物 學	植 物 學	動 物 學	地 理 概 論	英 文 法	國 文 解 釋	東 洋 史
上下二冊	上下二冊	上下二冊	上下二冊	上下二冊	上下二冊	上下二冊	上下二冊	上下二冊

發行所

東京上野公園寛永寺坂下
上根岸八十八番地

教文書院

(振替東京四六壹壹壹番
電話下谷三〇四七番)

第二十五卷第三號（每月一回十五日發行）

大正十四年三月十五日印刷
大正十四年三月十五日發行

定價金三十五錢

院書文教